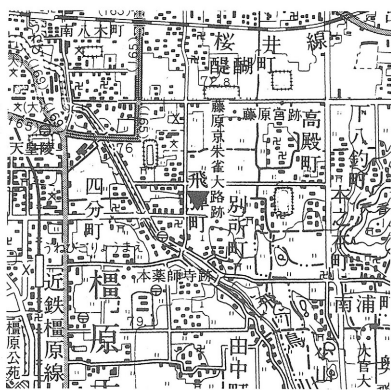


奈良・藤原京跡
ふじわらきよう

- 1 所在地 奈良県橿原市高殿町
- 2 調査期間 第六三―二次調査 一九九〇年(平2) 一二月
 一九九一年二月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 代表 牛川喜幸
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 七世紀末〜八世紀初頭
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(桜井・吉野山)

この調査は橿原市の分譲宅地造成に伴うもので、調査地は右京七

条一坊西北坪にあたる。発掘面積は五八〇㎡。藤原宮期の整地土の上面において、掘立柱建物三棟、素掘り南北溝三条、土坑一一基を検出した。
 SB七〇五〇・七〇六〇は調査区における主要建物で、ともに南北四間、東西

二間。SB七〇六〇の西隣には三条の南北溝があり、うち二条は北の第六六―二次・六二次調査区へと続く。これらの溝は西北坪内を区分する溝の可能性がある。

木簡は、主として、SB七〇六〇の北側に東西に並ぶ三基の土坑から出土した。これらの土坑の埋土は上層と下層に分かれ、上層は木質層を間層として青灰色粘土と砂の互層がレンズ状に堆積し、下層は暗灰色粘土と粗砂の互層が水平堆積している。上層の木質層から木簡七二六点(うち削屑七〇七点)が出土した。その内訳は、SK七〇七一が四一四点(うち削屑四〇三点)、SK七〇七二が四〇点(うち削屑三六点)、SK七〇七三が二七二点(うち削屑二六八点)である。他に建物SB七〇六〇の東に位置する小土坑からも木簡一点が出土している。今回は代表的なもの三〇点を紹介する。

8 木簡の積文・内容

一 第六三―二次調査

土坑SK七〇七一

(1) ・「符零物」^{〔持カ〕}

・「右京職解カ」
 今册人阿布

(2)

(91) × 19 × 3 019
 (95) × (7) × 4 081

2006年出土の木簡

(13)	□□ 子首□□ □	091	(25)	戸主□□□□ □ _[上カ]	091
(12)	□ 金万呂	091	(24)	□ _[山カ] 戸主□□□□ □□□□	091
(11)	□□ _[佐カ] 日□	091	(23)	大初位	091
(10)	二田造□□ _[塩カ]	091	(22)	□□長十五□ _[丈カ]	091
(9)	進正七	091	(21)	卅八	(115)×14×4 019
(8)	正八位上羽昨□	091	(20)	□ _[高向]	(65)×(20)×3 081
(7)	家地□ _[鳥カ]	091	(19)	赤末呂	091
(6)	□地損破板屋一間	091	(18)	連族□□	091
(5)	四坊刀祢□	091	(17)	□ _[伴々]	110×14×5 051
(4)	□ _[奉出]	(64)×(8)×2 081	(16)	□□ _[兵]	091
(3)	□ _[大藏カ] 殿□□□□ □ _[司カ] 殿□□	(159)×(7)×2 081	(15)	□□疾二	091
			(14)	畝火□	091
				土坑SK七〇七二	

(26)	□ 戸廿四	091
(27)	□ 五十三	091
(28)	少女 □	091
(29)	□ □ □ 〔疵カ〕	091
(30)	自 □ □ 百方 □ □ 〔者カ〕	091

紀年銘木簡はないが、(8)(9)(23)から八世紀初頭の木簡群とみられ、内容は出土地点でもある右京に関わるものや、籍帳類など官衙で使用される用語が目立ち、右京職関係の木簡の可能性がある。

(1)の表面は「符す。零の物持つ」と読み下せる。七世紀末から八世紀初頭にかけての正史には、ほぼ毎年雨乞いの記事がみられ、そのいずれかの行事に関連しよう。裏面の「冊人」は、雨乞いの儀式に要する物を運ぶための人数を記したものか。(2)は右京職の上申木簡。二文字目の字体は「京」。(3)(4)は直接接続しないが、同一簡の可能性はある。上部官司へ物品を搬出する際の記録であろう。

藤原京の坊名は、これまで「林坊」「軽坊」「小治町」などの固有名で知られていたが、(5)は坊を数詞で表す貴重な事例である。他に「坊」と書かれた削屑二点も出土している。また藤原京に「刀柵」が存在していたことを示す点でも重要。五文字目は「五」の可能性

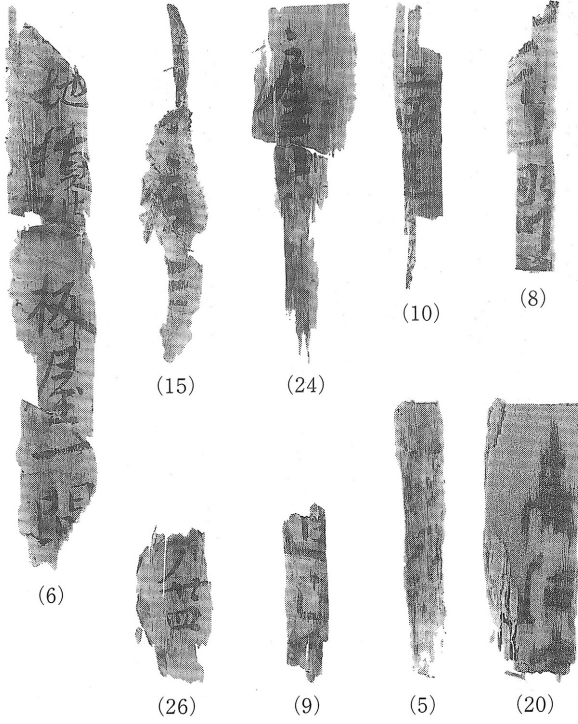
があり、「刀柵」が坊の中に複数いた可能性もある。

(6)(7)(22)は家屋などに関係し、他に「長」「高」など、大きさを記したとみられる削屑もある。(6)は破損した家屋を書き上げたものか。大倭国では、慶雲二年(七〇五)に大風で廬舎が損壊したという記事がある(『続日本紀』同年七月丙午条)。(8)の七文字目は縦画のみしかみえず、「臣」にはならない。(9)は正七位とみられ、おそらく「進」は「少進」の「進」であり、(2)と関連させれば京職の四等官と考えて差し支えない。

(10)～(13)(18)(19)は人名を記したものの。このうち(10)は、大化五年(六四九)三月に蘇我倉山田石川麻呂の頭を斬った物部二田造塩と同名か。時期はやや離れているが、同一人物の可能性もある。(20)は比較的大きな字体で文頭から書き始めているので、高向某への上申文書かもしれない。上半部のみ残る三文字目は、「中」などの字。(14)の「畝火」は、右京に位置する畝傍山の畝傍、あるいは人名なら、天平勝宝七歳(七五五)に右京班田司の算師畝火豊足(『大日本古文书』編年文書四、八一頁)などがある。

(16)は横材木簡。横材の出土は計六七点にも及び、「衛」「宮」「田」「八」などの文字が認められる。(15)(21)(24)～(28)は戸籍などに関係し、(21)(26)(27)は年齢を記載したものであろう。

また本調査区周辺の同坪内からも、「年六十三」「下戸」「雑戸」「百濟手人」などの戸籍関係や、官人などを召喚する召文木簡が出



(竹本 晃)

(二〇〇七年)

奈良文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』二二
九二年
奈良文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』二二(一九
九二年)

9 関係文献
土しており(本誌第二二・二四号)、当地に右京職関係の官衙が置か
れていた可能性が考えられる。